

ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』とイデオログの知の革命 ～新たな人類学としてのガストロノミー～

浦上 祐子

本論は、1825年の出版以来フランス美食文化の文脈で読み継がれてきたブリヤ＝サヴァラン (Brillat-Savarin, 1755-1826) の主著『味覚の生理学』(*Physiologie du goût*) を、当時の社会思想的潮流において俯瞰的に捉え直し、美食の言説として定着しているこの書物が、その深層においては啓蒙主義思想の流れを汲むイデオログの思想の応用的展開であり、それまで断片的に研究されてきた人間に関する高度な知識を自然に融合させた、新たな人類学と位置付けうる著作であることをあきらかにするものである。

17世紀のイギリスに誕生したロックの経験論とニュートンの実験科学は、18世紀の中葉のフランスで融合し、自然と人間を科学的に観察するビュフォンの博物学とコンディヤックの感覚主義を誕生させた。彼らの思想と方法を引き継いだとみられるブリヤ＝サヴァランもまた、自然と人間を科学的に考察、イデオログの「人間の科学」を織り込みながら、「ガストロノミー」と呼ばれる新たな人類学へと発展させた。その基本的な特徴は、宗教的にも哲学的にも貶められてきた感覚である「味覚」と「ジェネジック」（一般に性的感覚と呼ばれるもの）を基礎とする点にある。「個の保存」と「種の保存」という最も根源的な目的を持つこの2つの感覚は、「創造と生成」という共通の「力」を持つ欲動であるが、ジェネジックは「気まぐれ」かつ「圧制的」、味覚は「より慎ましやか」で「より節度がある」という性質上の差異がある。まさにこの差異によってこそ、味覚は人類を持続可能な形で完成に導いていく。キリスト教の伝統ではグルマンディーズは欲求を満たしたところから始まるから「罪」である。一方ブリヤ＝サヴァランにおいては、欲求が満たされたところから始まる人間固有の「食卓の快樂」にこそ価値があり、グルマンディーズは「美德」である。そこでは常に反省が生じ、会話が生まれ、諸学問が誕生する。文明を自然に発展させるこの漸進的欲動によって、人類はより完全なる完成へと向かっていく。

神学的人類学を根本的に転覆し、博物学的人類学を誕生させたのはビュフォンであった。教会の哲学的歴史を人間の哲学的歴史に置き換え、人間の精神は必然的に完成に向かうとする進歩理論の最初の祖述者はチュルゴで、それに続いたのがコンドルセであった。ブリヤ＝サヴァランの進歩観はこの流れの中にある。そこでは政治経済も人間の科学の重要な一要素として考察される。自然、富の分配、価値の理論、貿易と産業のメカニズムと制度、通貨と課税などのイデオログが論じた政治経済学的課題は、彼においては毎日生じる食べる欲求、とりわけグルマンディーズとの関連において考察される。ここに資本主義の生成過程で誕生したレッセー・フェールの体系が読み取れる。「味覚のなすに任せなさい」(*laisser-faire le goût*)と呼ぶべきブリヤ＝サヴァラン独自の欲求と秩序の体系は、経済に限らず、『味覚の生理学』全体を支配している。

コンディヤックが『動物論』で論じた「獲得された性質」としての人間の卓越した知的諸能力という課題は、ブリヤ＝サヴァランにおいては人間だけの属性である「グルマンディーズ」と「ガ

ストロノミー」の概念に集約されるものとして提示される。特に注目すべきは「言語こそが社会を主宰する」と語るコンディヤックに対し、ブリヤ＝サヴァランは「舌こそが社会を主宰する」というべき思想を展開していることである。人間の味覚の器官である舌は、精神より先に完成し、人間の精神、特にそれを支える言語に影響を与える。この二重の <langue> (舌と言語) は不可分なものであり、常に相互に作用しながら進化し、人間は個人としても種としてもより完全な完成に向かっていく。ここに舌と言語の心身相関論的進化論と呼ぶべき斬新な体系が示されている。

こうしたブリヤ＝サヴァランの心身相関論的思想を理解するためには、カバニスの生理学的イデオロギー、特に彼の「内的印象」の理論を想起すべきであった。カバニスによると、胃はすべての神経系と脳に大きな影響を及ぼすため、精神に重大な影響を及ぼす。ブリヤ＝サヴァランによると、消化の具合は気分を左右し、知性にも影響を及ぼす。ここにカバニスの思想的影響が端的に示されていた。睡眠中の精神である夢に関する言説も、同課題を論じたものとみられたが、特に人間の意識のずれに関心を抱き、生理学と心理学が交差するような人間の科学を模索したメーヌ・ド・ピランの直接的な影響がみられた。食事は夢を規定する。人間は覚醒中に自らの知的諸能力を行使し、適切な食べ方を判断し、選択することにより、睡眠中の夢さえも創造性豊かな人間固有の快樂へと転ずることができる。ガストロノミーの教授はその具体的な方法を教授する。

『味覚の生理学』は、観念の問題を形而上学の領域から心理学の領域に移行させたビュフォンの『人間の博物誌』の「感覚一般について」という章に、コンディヤックの分析的方法論を適用したものと言えた。彼は人間という存在を「出生、活動、飲食、睡眠、生殖、そして死」という6つの必然において分解、これらを順番に観察し、人間という存在を、全体として把握できるよう再構成している。さらに獣と共通の諸現象を人間固有の「食卓の快樂」に結びつけて観察するという独創的な方法の導入により、動物の一種としての人間(自然・身体性・獣性・生理学)と獣とは遙かに異なる存在としての人間(文明・精神性・人間性・心理学)との2重の性質を含めた人間の包括的な知識の提示に成功している。これが「食べるという存在としての、人間に関わるあらゆる事柄の理論的知識」と定義されるブリヤ＝サヴァランのガストロノミーの構造である。ブリヤ＝サヴァランが睡眠や夢の分析によってその進歩を望む「アンロポノミー」とは、人間の風俗も含めたビュフォンの『人間の博物誌』の未来形で、後世「文化的人類学」と呼ばれる学問を提起するためのものであると同時に、純粹に生理学的なカバニスのアントロポロジーと区別するためにブリヤ＝サヴァランが創った造語と言えた。その核をなすものこそが、最も日常的な習慣に基づく味覚を基礎とするガストロノミー (<gastro 胃 + -nomic> 習慣・学問) である。

ブリヤ＝サヴァランのガストロノミーは人間が自らの諸能力によって生み出すあらゆる学問と密接に結びつく学問として提示される。ここにイデオロギー共通の「知の統一という主題」が見て取れる。それまで断片的にしか研究されてこなかった人間をめぐる知識は、1825年の『味覚の生理学』ではじめてその統一を得る。人類普遍の要求と快樂に基づく人類のあらゆる知識を包摂するブリヤ＝サヴァランの「超越的ガストロノミー」は、個人を、ひいては社会を、そして人類を癒し、幸福にすることを目指している。自然とその一部である人間を理解する目的においてこそ、ブリヤ＝サヴァランはグルマンなのである。